

はしがき

ローマに留学して神学を修めたヘンリケ王子は、1520年司祭に叙せられて北アフリカに派遣された。彼の祖国は大河の畔に栄え、都サン・サルバドルには石造りの家が並び、周囲の王国を朝貢国としていた。

彼はスペインやポルトガルの王家の出身ではない。コンゴ王アフォンソ1世の息子ヘンリケ・キヌ・ア・ムヴェンバである。都のサン・サルバドルは祖父ンジンガ・ンクウ王がキリスト教を導入して自ら改宗（洗礼名ジョアン1世）するまではムバンザ・コンゴと言った。コンゴ王国はリスボンなどに大使館を設置して王侯貴族の子弟を留学させ、また国王自らポルトガル語を自在に操りポルトガル王ジョアン3世とポルトガル語で多くの書簡を交換、ローマ法王にも親書を送っている。

けれども今日、コンゴ川の急流沿いに広がるのは熱帯雨林と漆黒の闇ばかり、落城して久しいコンゴ王国の栄華の残り香を嗅ぐことはない。

時は下って19世紀から20世紀への変わり目、アフリカの王国が次々とヨーロッパの軍門に下って植民地化されていく中、魔の手は白人による白人の植民地化にも及んだ。南アフリカのオランダ人の末裔すなわち白人のボーア人たちはダイヤモンドと金を見つけたばかりにイギリスに攻め込まれ、婦女

子は強制収容所に送られて飢餓のうちに死んでいった。

かつて他の大陸のように「普通の」国々が栄えていたアフリカ大陸は、16世紀以降、鉄砲を自国でつくれなかったことで泥沼化した奴隷貿易という惨劇のみならず、金や象牙などの豊かな大地であったがゆえに魔の手にかかったという悲運も重なって、社会、経済、文化そして政治の破壊の織りなす歴史に陥っていった。

今日のアフリカのほとんどの国が多言語国家であること、そして逆に複数国にまたがる同一言語が多いこと。この国境と民族の食い違いはベルリン会議（1884—85年）の呪われるべき遺産であるが、過去を問うてばかりでは国造りは良い方向には進まない。21世紀になって、アフリカの人々はようやく自分の運命を自分の手で開き、自分の歴史を自分で書きうる環境を得たのではないだろうか。冷戦が終わって米ソの代理戦争から解放されたこと、学校に通う子どもたちが増えたこと、女性農民をはじめとして国民の中に企業家精神が育ってきていることなど、勇気づけられる事実も多い。

ただ、本当にこの芽が育ってやがて大きく実るのだろうか。それはアフリカが「ギブ・ミー・チョコレート」を脱することができればイエスであり、そうでなければノーである。それはとりもなおさず、日本や欧米諸国がアフリカに対して慈善（チャリティ）という上から目線の関係ではなく、連帯（ソリダリティ）という対等なパートナー関係を築く用意があるか否かにもかかっている。

この本に流れる通奏低音は、「歴史と正義は勝った者が書く」という人類史を通じた冷徹な事実が、特にアフリカに対してアンフェアであったことへの理解を少しでも広げたい、というささやかな願いである。またこの本はいかなる政治的意図もないことを念のため記しておきたい。

実は、アフリカの歴史と開発の本を書こうとのお誘いは今から十数年前に共著者の小浜裕久氏と勲草書房の宮本詳三さんからいただいた。それがここまで遅れたのは、ひとえに忙しいだの海外勤務だなどとうそぶいては怠けていた石川の責任であり、にもかかわらず出版にこぎつけたのは小浜さんの恐ろしい叱咤激励と、宮本さんの温かい応援、そして何よりもお二人の忍耐、忍耐、また忍耐のたまものである。お二人には感謝の言葉もない。

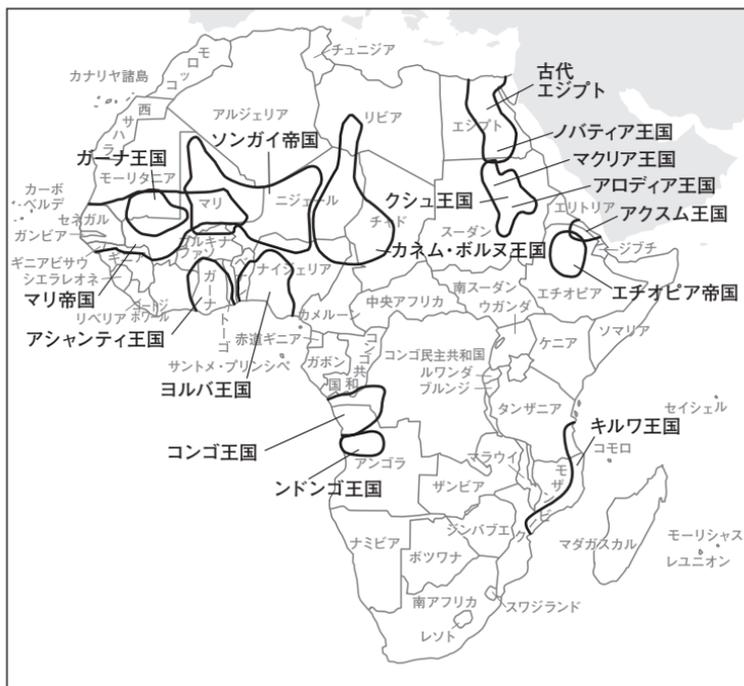
本書は、序章と第10章を実際の現場にも詳しい開発経済学者の小浜さんが、第1章から第9章を石川が執筆した。引用文献参照については細心の注意を払って記載したが、万が一見落としがあった場合には可及的速やかにお詫びと訂正をいたしたい。

読者の皆様が、この本を楽しみながら読み、アフリカへの関心と愛情をさらに深めてくだされば望外の幸せである。

2017年9月

石川 薫

本書に登場するアフリカの諸王国



「未解」のアフリカ 目次

はしがき

序章 未解のアフリカを考える…………… 3

第1章 私たちの知らないアフリカ…………… 13

1 アフリカは私たちにとって未解か 13

1-1 アフリカ54か国と言うけれど 13 / 1-2 アフリカという大陸 16

2 アフリカと外部世界 32

2-1 文化とは何か 32 / 2-2 野蠻とは何か 38 / 2-3 自己責任 42

第2章 砂漠の向こうの王国…………… 45

1 砂漠の向こうに生きる人々 45

1-1 「文明」からの「隔絶」 45 / 1-2 サハラを越えて 50

2 鉄器の広がり 55

2-1 火を使う人々 55 / 2-2 アフリカのバーミンガム 56 /

2-3 西スーダンの鉄器の興り 59 / 2-4 インド洋を渡って 60

3 砂漠の向こうの帝国（飛鳥時代から関ヶ原まで栄えたアフリカの国々） 62

3-1 アフリカの誇りガーナ王国（8世紀—13世紀） 62 /

3-2 ライオン・キングが建国したマリ帝国（13世紀—16世紀） 66 /

3-3 蜜が流れるソンガイ帝国（11世紀—16世紀） 71 /

3-4 サハラの向こうの繁栄と平和の終焉 73

コラム 森の民との沈黙の交易——金の仕入れ方 76

第3章 四百年続いた拉致と社会の崩壊…………… 77

1 なぜ奴隷が必要だったのか 77

1-1 新大陸で必要とされた技術 77 / 1-2 後の奴隷価格の高騰 79

2 奴隷狩りの始まりと奴隷の位置付け 80

2-1 奴隷狩りの始まり 80 / 2-2 「積み荷」という奴隷の位置付け 83

3 奴隷貿易のアフリカへのインパクト 85

3-1 コンゴ王アフォンソ1世の予言 85 / 3-2 奴隷貿易の経済的インパクト 89

4 奴隷の禁止 92

第4章 神々の大陸アフリカ……………101

4-1 なぜ奴隷制の禁止ではなく奴隷貿易の禁止だったのか 92 / 4-2 奴隷制の廃止 94

コラム 砂糖とキャッサバ 95

コラム 赤土の大地の農業開発と日本——セラード高原 99

1 雨と豊作を乞い、先祖や偉人を祀り、森や山には神が宿る 101

1-1 古来の宗教 101 / 1-2 伝来宗教と伝統宗教の混淆 103

2 イスラム教の興りとアフリカへの伝播 105

2-1 アッラーとゴッドは同じ神 105 / 2-2 イスラムの興りと地中海沿岸のイスラム化 107 /

2-3 サブサハラ・アフリカのイスラム化と「知」の世界の誕生 109 / 2-4 東アフリカ 115

3 聖家族はアフリカに避難していた 116

3-1 エジプトの「近代化」とヨーロッパ 116 / 3-2 エジプトに逃れた聖家族 120

4 アフリカのキリスト教王国 122

4-1 キリスト教時代の方がイスラム教時代より長かったスーダン 123

4-2 エチオピアの興りと紅海という地政学的要衝 127

5 エチオピアにおけるキリスト教とイスラム教 132

5-1 モーゼの十戒 132 / 5-2 エチオピアとイスラム帝国との関係 133 /

5-3 キリスト教のポルトガルとの接触がもたらした混乱 136

コラム 日本とエチオピア 139

6 東西に走るイスラム教とキリスト教の境界線 140

6-1 19世紀の悲惨 140 / 6-2 キリスト教の南スーダンの独立 142

7 イスラム圏における世俗国家の重要性 143

7-1 アメリカン・ロックで結婚披露 143 / 7-2 神聖国家イランの真意 144

第5章 ウェストファリアの呪縛——言語と国家……… 149

1 文字と母語 149

1-1 サブサハラ・アフリカの文字 149 / 1-2 母国語と母語——アフリカの特異な事情 153

コラム 学校で教える「国語」とは何か 159

2 「民族国家」とは何か 161

2-1 ウェストファリア条約が生んだ「民族国家」の呪縛 161 /

2-2 ヨーロッパにおける「民族国家」の虚構 164

3 アフリカの苦悩あるは The United States of Africa 168

3-1 パンアフリカ主義 168 / 3-2 恣意的国境の矛盾と「アフリカ合衆国」構想 173

4 民族自決? 179

4-1 恣意的につくらざるをえない国家の一体性 179 / 4-2 民族自決のもたらしたもの 184

コラム 国際語とは何か 186

第6章 教育は大事だと言われても……………189

1 なぜ学校に通えないのか 189

1-1 女子が教育を受けてはならないのはイスラムだからなのか 189 /

1-2 教育についての国際規範 195

2 アフリカの教育現場 198

2-1 サブサハラ・アフリカの厳しい教育事情 198 / 2-2 教育の優先順位を上げる 201

3 教育と食 209

3-1 学校給食の威力 Food for Education 209 / 3-2 井戸、学校、コミュニティー 211

4 職業訓練の重要性 212

4-1 手に職をつける 212 / 4-2 世界に打って出る 215

第7章 病との闘い……………219

1 国家と健康 219

1-1 国家の盛衰にかかわる疾病 219 / 1-2 政治と国民の健康 225

2 熱帯病 228

2-1 ハンデイを抱える熱帯諸国 228 / 2-2 エボラ出血熱の衝撃と教訓 231

3 エイズ・結核・マラリア 236

3-1	世界三大キラーの現状	236 /
3-2	三大キラーとの闘い——世界基金をなぜ創設したのか	248
4	熱帯病の根絶へ	252
4-1	熱帯病との闘い	252 / 4-2
	足元をすくわれる先進国	254
5	水と衛生	256
5-1	子どもの敵——水と衛生（トイレ）	256 / 5-2
	途上国の保健ニーズの多様性	259 /
5-3	日本が世界をリードする水と衛生、しかし課題が残る衛生	260 /
5-4	水という資源の偏在	262 / 5-5
	頑張るアフリカ	264
第8章 立ち上がる女性たち ……………267		
1	闘う女性たち	267
1-1	アシャンティ王国の女性たち	267 /
1-2	祖国のために戦った女王はヤア・アサンテワだけではなかった	272
2	母系社会の伝統	276
2-1	西アフリカの母系社会	276 / 2-2
	マーケット・マミーたち	279
コラム	風呂好きだったマリとソングアイの女性たち	281
3	活躍する女性たち	282
3-1	進取の気性に富むのは女性	282 / 3-2
	女性農民が現金収入を得る道を進む	285 /

	3-3	公開講座の女性農民	287
4		働く女性たち	289
	4-1	バラと女性農民と飛行機	289 / 4-2
		茶を摘む女性たち	293
第9章		ニュー・インダストリーの興隆 ……………	295
1		アフリカの農業	295
	1-1	赤道直下の花の王国	295 / 1-2
		ケニア農業の出発点	297 /
	1-3	欧米の検疫をクリアして栄えるインゲン	298
2		地元消費者が支えた酪農	302
3		「ニュー・インダストリー」の影をチャンスに	304
4		換金作物コーヒー	306
	4-1	コーヒーの生産	306 / 4-2
		ケネディ大統領の慧眼	310 /
	4-3	コーヒーの起源、コーヒーと戦争と革命	319
第10章		サブサハラ・アフリカの経済発展——Africa Rising? ……	323
1		サブサハラ・アフリカの経済——アフリカは元氣か?	323
2		資源の呪い	331
3		経済発展は不断の構造調整	336

4 植民地主義・資源・まともな政府
337

あとがき
341

参考文献
.xxx

注
ix

索引
ii

あとがき

「序章」にも書いたように、石川薫は、ある意味「アフリカの専門家」で、思い入れも強い。でも、日本の多くの「アフリカ専門家」とはえらく考え方が違うし、知見も異なる。あの「広いおでこの裏側」に、妙チクリンな知識がいっぱいいっぱい詰まっているのだ。

小浜は、「アフリカ専門家」でもないし、アフリカに住んだこともない。と言うより、70年近く生きてきたが日本以外の国に住んだことはない。まあ、世間では開発経済の研究者ということになっているから、調査や研究のために多くの国に出かけた。数えたこともないが、100回とか200回は出張しているかもしれない。南米のある国には十数回行って、すべてホテル住まいだけで合計すると7か月くらいいた国もある。石川薫がカイロにいたとき、彼の家に何度か泊めてもらった。一回などは、誘ってもないのに妙な友だちまでくっついてきて、彼の家に泊めてもらった。思い起こせば、ロンドンでもパリでも石川薫とメシを喰ったと思う。

自分がバランスがとれた思考の持ち主だとは思わないが、石川薫の「妙チクリンなアフリカ論」を本にしたなら、ちょっとは「世のため」になるかなと、まずは悪友の石川薫を騙してから、勁草書房の宮本詳三さんに話した。宮本さんは、あの容貌からは想像できないが、えらく過激だ。いつも「もっ

と過激に、もつと」と言われてる。²

記録を見ると、石川薫と宮本さんと田村町にあった居酒屋でこの本について相談したのは、2002年5月だ。「仕事が遅い」のは人後に落ちない、おつといけねえ、そんなこと自慢しちゃいけないんだ。それにしても15年はなかなか。いつものことながら宮本さんには迷惑を掛けっぱなしだ。浅沼・小浜(2011)の「あとがき」にも書いたように、宮本さんとは長いつきあいだ。いつどこで初めて会ったか記憶は定かじゃないけど、『日本と発展途上国』(大川 1986)の出版打合せで当時渋谷にあった勁草出版サービスタワーで会ったことは確かだから、つきあいは30年を超える。

『未解』の「アフリカ」という書名も気に入っている。初めの頃、『野蛮』な「アフリカ」というタイトルも考えたが、『野蛮』という言葉自体もそうだけど、ヨーロッパ人たちがよつぽど「野蛮」なのだから、内容にそぐわない。

最近次の本のために少し「幕末」の勉強をしている。井上(2006)は、19世紀半ば「未開」とされた黒人伝統文化には、欧米とちがって、少数を真に尊重するような独自の包容力があつた。……反アパルトヘイト運動を支えた伝統文化の根強さは、まさに敬服に値する。それは、未開どころではない力量をもっていたのであり、欧米の文明を逆転したのである、と書いている(2011)。

ある時期まで仮題として『未開』の「アフリカ」にしていたが、それじゃあまりにまともすぎて、石川薫の「過激な」記述にそぐわない。何しろ「常識人の小浜さん」がビックリするくらい「ヨーロッパ史観の欺瞞と傲慢」を、これでもかこれでもかかと書いているのだ。

頭を柔らかくして、教科書を盲信しないで、世界の歴史を勉強してきたつもりだけど、石川薫の原

稿を読んでみると、「おとなしくて従順な小浜さん」³も「ヨーロッパ史観」に毒された日本の世界史教育の畏にはまっていたかと思うことがある。

何はともあれ、この妙な本が、出版にこぎ着けることができている。畏友石川薫は「はしがき」に「叱咤激励」と書いているが、小浜さんとしては、「そつとやさしくリマインド」したただけだと思っている。数年前、高校の先輩が本の「はしがき」かなんかに、「小浜教授の叱咤激励、というよりも叱咤オンリーも本書の完成に大きく貢献した。いつもわたしの方が後輩であるかのような錯覚を起こさせる小浜教授の叱咤であるから、とても効くのである」と書いていたのを思い出す（大来 2010, p. viii）。

明治以来の「ヨーロッパ史観」に基づいた日本の世界史教育に影響された人たちが、この本を読んだ、アフリカの歴史や現実に目を向けてくれればとても嬉しい。第10章に「まともな政府ならジンバブエはもっといい国になっていたと思う」と書いた。大統領が替わって、ジンバブエの庶民の暮らしもよくなるかといいなあとと思う。

2017年11月

小浜裕久